明治七年（一八七四）八月に近代医事衛生制度が制定され、翌年からは『衛生局年報』が刊行されるようになる。この『衛生局年報』は大正三年（一九一四）まで出され、そこには全国の伝染病統計についての記載もある。しかし、チフスや赤痢等の五種ないし六種の伝染病が深刻な時代であったため、これらの地方別患者数を含めた詳細なデータがある一方で、狂犬病に関する記述はごくわずかに限られる。初出の明治三五年（一九〇二）には、「狂水病」が全国で一件、「犬咬傷」が九一件（内前年度からの継続が四件）とあり、「犬咬傷」患者は外来によるものとなっている。「犬咬傷」の詳細は不明だが、「狂水病」は狂犬病の別称である。その後明治四二年（一九〇九）および四五年・大正元年に、各三件の「狂水病」の報告がみられ、明治四四年にも五件記されている。いずれも患者死亡比率は一〇〇パーセントである（内務省衛生局編『〈明治期〉衛生局年報』第九・一〇・一二・一三巻　東洋書林、一九九二）。

大正一四年から刊行されている『家畜衛生統計』（農林省畜産局等編）になると、狂犬病の欄が設けられ、登録犬数や予防注射延数等についての都道府県別のデータが示されている。これは第二次世界大戦後に再び狂犬病が流行したためと考えられる。

前述の高山によれば、昭和二三年（一九四八）に東京で流行が始まり、狂犬病の犬は九一頭、翌年には一〇〇頭を越えて関東一円に広がり、患者数も七六名になっている。一九五〇年は流行がピークに達し、狂犬病の犬は八六七頭となった。

その後昭和三〇年になると、神奈川県での狂犬病発生数は一八になり、狂犬に咬まれた人の数は三六人、やはり関東地方に多い傾向がみえる（農林省畜産局編一九五六『家畜衛生統計』財団法人農林協会）。

(25) 註(21)の文献に同じ。四〇頁。

［付記］

紫波町の調査では、紫波町文化財調査委員の田村由郎氏、古澤友治氏、長澤聖浩氏にお世話になりました。特に長澤聖浩氏には二回に亘る調査にご協力いただきました。

また、お話いただいた皆様、西和賀町の太田祖電氏にもお世話になりました。ここに記して、心より御礼申し上げます。

をも襲うものとして、人々は常に狼を注視していた。近づいてきた時には煙草や松明の火で退け、山歩きの際には護身用の鎌も常に身に付けていた。小正月には、集落全体で木製の法螺貝を吹き鳴らす「オイヌ追い」の行事を行い、狼等の獣を山へと追いやっていた。人間と野生動物との棲み分けを願うこの行事は、東北地方にのみ確認されるタイプのものである。

近世期に東北地方を襲った大凶作の時には、飢饉によって多くの人命が失われている。盛岡藩内で起きた四大飢饉のうち、第三の天明の大飢饉の際には、狂犬病が流行していたこともわかった。遠野に伝わる「オイヌになった人」は、体中を狼に咬まれた結果、狂犬病を発症した事例を示しているものと考えた。

人々が語り伝えてきた伝承には、記録にはない貴重な多くの生の営みが隠されている。記録に残されているものは、歴史のごく一部に限られており、その詳細や、周縁にこそ、私たちが本当に知るべきことはあるように思われる。

あまり知られていないニホンオオカミの生態や、狼に対峙してきた人々の在り様について、私たちは今一度、改めて伝承から学ぶ必要がある。

註

(1) 南部成美二〇一四「訳者あとがき」（ギャリー・マーウィン『オオカミ迫害から復権へ』白水社）二〇八頁。
(2) 長澤聖浩一九七七『百歳。作山リエさん聞書き集』（自家版）三三頁。
(3) 註(2)の文献に同じ。三四頁。
(4) 長澤聖浩氏のご教示による。その際、文久三年の地図（写）も拝見した。
(5) 二〇一〇年八月五日調査。話名は特になかったため、便宜上筆者が付した（以下同様）。
(6) 二〇一〇年八月五日調査。
(7) 二〇一一年八月一〇日調査。
(8) 一九九七年九月一〇日調査。
(9) 菱川晶子二〇〇九『狼の民俗学　人獣交渉史の研究』（東京大学出版会）二二二頁。
(10) 前掲書に同じ。一四〇頁。
(11) 菱川晶子二〇一一「小石エイ媼の昔語り―岩手県上閉伊郡大槌町の伝承―（二）」（「一般教育論集」第四〇号　愛知大学一般教育研究室）七七頁。
(12) 前掲書に同じ。
(13) 二〇一〇年八月四日調査。
(14) 一つは文化三年（一八〇六）に「狼狩りにほう美出、桂子沢で二匹とる。」であり、もう一つは文政九年（一八二六）の「狼多く、狼狩りに人足出る。」というものである（沢内史談会編二〇〇〇『沢内年代記（総集編）』沢内村教育委員会）。太田祖電氏にご教示いただいた。
(15) 門屋光昭一九八九『隠し念仏』（民俗宗教シリーズ　東京堂出版）二四九頁。
(16) 註(9)の文献に同じ。三一九～三三五頁。
(17) 註(9)の文献に同じ。二九一頁。
(18) 盛岡市教育委員会・盛岡市中央公民館編一九九〇『盛岡藩　雑書』第四巻（熊谷印刷出版部）一〇頁。
(19) 註(9)の文献に同じ。二九七～三〇六頁。
(20) 一九九七年九月一〇日調査。
(21) 盛岡気象台編一九七九『岩手県災異年表』（岩手県）二四頁。
(22) 前掲書に同じ。四一頁。
(23) 平岩米吉一九八一『狼―その生態と歴史』（動物文学会・池田書店）一〇八～一一八頁。同書では、東北地方は山形県の酒田や秋田県山本で寛保二年（一七四二）の夏から病狼が出たことや、宮城県柴田郡で寛政年間（一七八九～一八〇〇）に病狼が人を襲ったと記す書物等が詳しく紹介されている。
(24) 日本国内における狂犬病の感染は、徹底した撲滅対策が講じられた結果、一九五七年以降確認されていない（高山直秀二〇〇〇『ヒトの狂犬病　忘れられた死の病』時空出版）八一～八七頁。

うに唸り声をあげ、四つん這いになって雲壁を飛び歩いていた。雲壁とは、長押の外側の壁を指す。そのような高い壁をも軽々と跳び歩く尋常ではない父の様子に、人々は「狼になってしまった」と思い、壊れた家を元に戻して出口も塞いでしまう。

閉じ込められた家の中で、父は七日七晩唸りながら飛び回った末、飢えて死んだと語られている。そういう人があった、と伝えられている。

本話を読んで、その内容に驚くと共に、一つの疑問が生じるのではないだろうか。父の変貌ぶりを見た人々に、戸惑ったり困惑した様子はない。「狼になったから助けられない」と、すぐに諦めて対処しているのがわかる。つまりは、このような狼に咬まれた人物がこれまでにも存在し、どのように対処したら良いかを人々が知っていたように理解できる。そして、「狼になった」とは、狂犬病を発病したことを意味しているのではないだろうか。

岩手県内の狂犬病についての記録は少なく、前述の『雑書』にも見出すことができない。しかし、『岩手県災異年表』には、関連する記述が二つみられる。一つは、沢内地方で「狗疫病流行、沢内狗四疋残る」[21]というもので、犬の疫病が流行し、多くの犬が死んだことがわかるが、これが狂犬病か否かは不明である。元文四年（一七三七）のことである。

また一つは、天明三年（一七八三）のこととして、「今年病犬多く、人に喰けば右より班気（ママ）（狂の誤りか）相発して人多く死に至るものあり。」[22]と記され、狂犬病の流行が確認できる。記述からは、天明三年以前にも病犬がいたと理解できる。それがこの年に多くなったというのだろう。「病犬」に喰いつかれると狂気を発するという点は、遠野の伝承にも通じている。

この病いは、犬に近しい狼にも容易に感染するものであり、病狼は、享保年間およびその後三〇余年を経た安永年間に、西日本を中心に多く出た記録がある。[23]いずれも一八世紀になる。

現在は感染しても発症までの潜伏期間が長いことで知られている狂犬病だが、発症すればほぼ一〇〇パーセントの確立で死に至る病いである。[24]

年表には地域についての記載はない。これは、藩全体に広く被害が広がっていたとも読み取れる。また、天明三年は、南部藩四大飢饉の一つとされる「天明の大飢饉」が起きた年である。天候不順による大凶作のため、藩内で四万人を越える餓死者が出た上に、疫病の流行によって二万三千人余りの疫死者も出ている。[25]そのような壮絶な状況の中で狂犬病が広がったのであり、この疫死者の中には、狂犬病による死者も含まれていると考えられる。

三、まとめ

岩手県紫波郡紫波町ならびに遠野市の伝承を中心に、狼と人との関わりについてみてきた。また、和賀郡西和賀町や上閉伊郡大槌町の関連資料も適宜加えた。

本稿では、これまで明確ではなかった木製の法螺貝や、獣に用いられた槍について明らかにすることができた。また、今では珍しい新墓に供えられる狼除けの鎌についても示すことができた。紫波町に勧請された三峯神社の存在も、これまで明るみに出ていなかったものである。

今回示した紫波町の伝承資料からは、狼が人里近くの小高い山に生息し、人々の身近に常に存在していたことがわかってくる。紀伊半島等の山深い山村で狼に遭遇するのとは異なり、里山と呼べるような比較的平坦な地で人と狼とが頻繁に接触していた様子が理解できる。

日頃はそれ程危険ではない狼だったようだが、状況によっては人間

（一三）

タリと嬶の上さ壁が倒れて、ボトンとのさったものがあったんだと。それがオオイヌだったんだと。そうしてそのオオイヌがすぐ嬶の布団さ上がってミリミリと喰ったんだと。被ってたからな。

「父、食れるが、助けてけろ、助けてけろ」って被ったまま叫んだと。そうしたところが、ほれ父、隣に寝てるから、助けねばなんね。

だども、昔は真っ裸で寝ればぬくいっていって、私たちは真っ裸で寝たもんなの。丸裸で。だから、寒くても何してもすっかり脱いで、潜って寝たもんだもの。あれ、着物着れるかなって思ったかもしれねえども、仕方がねえから我の被ってた布団をオイヌさ被せたんだと、こう押さえるしてな。そうして押さえたども、

「押さえたから早く木割れ（鉞のような道具）を持ってこ」って言ったど。

「嬶さオイヌにうまい具合に被せたから、早く木割れを持ってこ、オイヌの首取っから」て言ったど。寝てる傍らが仕事場だから、

「その辺に木割れあるはずだから、それ持ってこ」言ったんだと。そうしたところが、狼押さえてもらったから、布団が開いたから、そのまま嬶は逃げたんだと。そして生まれた家走って行ったんだと。そしてから「おれの家さオイヌが入ってきて、おれの父押さえて「木割れを持ってこ、持ってこ」って言ったんたんだども、おれおっかねから、走ってきた」って言ったんだと。そうしたところが、

「何たら、そんなでは木割れねば殺せねえんだもの」

「そんなことわかんねえんだ」って。

みんなして刃物持って父助けさ行ったんだと。その時ハ、夕方であったと。そしてそこらの人達頼んで行ったところが、その父はオオイヌの首玉落としてたったと。だども、ほれどうした風になったもんだかな、父はすっかりオイヌにかんづかれて、もう傷だらになって真っ赤になってたったんだと。そしてもともと何にも着ねえで寝てたもんだ

（一二）

から、かんずかれねえったって、肌が出てんだもの、丸裸だから。それで全身かんずかれてかんずかれて真っ赤になっていたったんだって。そして、正気でなくなってな、ウーッて四つん這いになって唸って、狼と同じになってらったんだと。そして助けさきた人も訳わかんなくなってしまってな、四つん這いになってそっちさ跳び、こっちさ跳び、障子より高いとこの壁、ああいう雲壁から雲壁さ、ビュンビュンと、狼と同じに跳び歩いてな。

「こりゃ狼になってしまったから、助けることはできね」っということで、助けさ行った人達は、出口一つを塞いだんだと。そして破ったところも塞いだし。とにかくそれを塞いでしまった。

毎晩ビュンビュンと跳んで歩ったと。跳ね歩いたんだと、気い狂ったから。あっちゃ跳びこっちゃ跳び、跳んで歩って、七日七晩唸って、狼になって、そして飲まず食わずで死んでしまったんだと。そういう人があったんだとって。（話者六九歳女性　筆者聞書き）[20]

「これは昔話ではなく、実際に生きた人の話として伝わっている」と語り手は言う。遠野でも昔語りに秀でた人物と知られる語り手の話の中で、本話は特異な光を放っている。

山の端に建てられた簡素な家にやってきた狼は、何度も体当たりしているうちに、ついには壁を倒してしまう。布団に乗った狼が喰い付いて、悲鳴を上げる嬶。隣に寝ていた父は、自らの布団で狼を押さえつけ、嬶に木割れを渡すように告げる。しかし、気が動転した嬶は、そのまま実家へと走り去り、事情を知った家人達が駆けつけた時には、命は助かりながらも父は既に体中を狼に咬まれて血だらけになっていた。

通常なら、狼を倒した人として称えられるところだが、この話はそうはなっていない。狼に咬み付かれた父は、まるで狼になったかのよ

狼に襲われて命を落とした旅人の痕跡は、江戸時代の盛岡藩家老席日誌『雑書』の中にも確認される。次の通りである。

毛馬内主計知行所黒川村道端ニたをれ者有之、但廿日之朝ニ見出昨日披露、右たをれ者着物二つ着候て脇指を差、す足ニざうりをはき、くび無之、脇より尋出ス、つらの皮大かめくいはき年頃しれ不申、くび切候共見へ分ス、切口をくいちらし片うて肉くいちらし下ニ敷候、うでハゆびのうら計くいちらし、臥候下ニ計ゐり存脇へハちれ不申、致僉議候へとも、近所之者ニハ無之旨主計披露、死骸ニ御番付置、其近辺之者ニ無之共、宿等借候覚も候哉と僉議可仕旨、主計御代官へも申渡之[18]（傍線筆者）

黒川村の道端に行き倒れていた旅人についての詳細な記述である。黒川村は、現在の盛岡市黒川に当たり、偶然にも紫波町に隣接する地区である。

近くに住む者でもなく、脇差しを刺しているとあることから、旅人と考えて良いだろう。顔面を喰われているために年齢はわからない。闘う間もなく襲われたのか、首を喰いちぎられた無惨な様子である。延宝五年（一六七七）一月廿二日の記載になる。先に挙げた紫波町の場合も、その惨状から狼によるものと見做されたのだろう。

『雑書』におけるこのような旅人についての記録はこれのみであるが、延宝二年（一六七四）以降に狼が人家に入ってくるようになり、元禄四年（一六九一）頃から人が襲われたという記載が増えてくる。これについては既に記したことがある。[19]

一方遠野市では、他では聞いたことのない次のような珍しい話を聞いている。

事例六、狼になった人（遠野市松崎町）

上郷のとこの本当の人の話だと。

上郷の人が、山端（やまつばた）さ別家になったったんだと。分家になったったと。それで掘建て小屋みたいに建ててからに、窓もねえ、出入り口を一つ建ててもらって、土間があり、板場っこありで、一部屋の家だったんだと。

そうしたところが、ある冬にとってもオイヌの遠吠えがしたったんだと。

「父（とと）、あれオイヌじゃねえか」嬶言（し）ったど。おっかながるから、

「何てもねんだ、遠くで鳴えてらから」っていうことだったんだと。だらば寝べしっつことで、火消して寝たんだと。

夜中になったところが、ドツーン、ドツーンと壁さ当たる音がしたったんだと。

「何か当たるが、あれオイヌでねえだべか」って言ったんだと、嬶。そしたればほれ、たまに悪戯っこして、魂消らかす夜遊びして歩って、魂消らかすこともあるんだ、若い人たち同士だからなあ。「誰か悪戯してらんべかなあ」って父は言ったんだと。そうしたところが、あんまりドツーン、ドツーンと壁さ当たるんだと。

「あれはオイヌでねえか」って嬶がおっかながるから。

「だら、布団被れ、布団被れ」って、言ったんだと。だども、昔のことだから、今みてえにむくむくと綿が入（へえ）ってるわけではねえから。刺し付けて刺し付けて、切れっこ何べんも刺した生地で、そういうものさ下は藁してぱふっとして、藁の上さして着れば、上等な方。昔のことだから、それで立派な布団だったんだな。だから被れ被れと言ったって、薄き布団だったんべ。だとん、まずおっかねえから被れ被れって、被ったんだと。

そうしたところが、ドツーン、ドツーンとあれしてだったつが、バッ

（一一）

写真９．新墓に手向けられた狼除けの鎌。固定するため木の枝と縄で結びつけられている（高金寺にて）。

写真８．赤沢・船久保地区の槍。手前全長211.8cm（刃先23cm）。柄直径4cm。猟師が火縄銃と共に持ち歩いたもの。後には護身用にも用いられたようだ。

魔除けでもあるが、墓地や死者と結びつく狼の伝承は、その実態と無関係であるとは言い切れないだろう。

花立にある小高い館山周辺には、狼に殺されたといわれる旅人を葬った塚があった（写真10）。前述の長澤氏の曾祖母の家人が、家近くで見かけて埋葬したものである。長い年月の中で姿を消してしまったが、長澤家にはこの塚の存在が今も語り継がれている。道の片側に広がる門田山にはかつて狼が生息しており、北上川への狼の往来が見られた地の一つもこの場所であった。

写真10．館山の塚があった所。右側の林は後年木が生い茂ったものであり、かつては草刈り場等が広がっていた。

狼の多くいたところだったと理解できる。「オイヌ追い」は、人間や家畜を狼の害から守るための一つの手立てであり、強い願いの込められたまじないだったともいえる。終戦後の昭和二五、六年あたりまで行われていたようだ。

ホラノボーは、紫波町と同じように桐の木を炭火で焼いて、洞を作る手作りの品であった。同村にある碧祥寺博物館に多数展示されているホラノボーを見れば、名称こそ少し違うものの、紫波町のホラノゲエと全く同じ物であるのがわかる。同様のものは、同県葛巻町や秋田県等でも使われており、葛巻町ではこれを木の貝吹きと呼んでいた。[15] その名前や形状から、修験者が使用している法螺貝を模したものであることは自明であろう。

オイヌ追いは東北地方にみられる民俗儀礼であり、狼の民俗儀礼の中の一つの型を示すものだった。秋田県以南にみられる祈願型に対して、岩手県以北にみられる鎮送型に当たる。これについては、既に論じたことであるためこれ以上は触れないが、[16] 文献でしか知ることのなかった木製の法螺貝の詳細について、今回明らかにすることができた。

（三）、狼と来襲の痕跡

紫波町赤沢に鎮座する青麻（あおさ）神社の境内には、埼玉県の三峯神社の分社もある。三峯神社は、狼の眷族が広く信仰を集める社として名高い。勧請の年代は明確ではないようだが、嘉永六年（一八五三）に青麻別当善養院十九代至興法諄によって再建されたと伝わっている。火災、盗難、野獣の防禦、豊作や商売繁盛、家内安全に特にご利益ありとして、盛岡や日詰、花巻、土澤等近隣の人々に崇敬されてきたようである。岩手県内では、旧胆沢郡前沢町（現奥州市）にも三峯神社の分社があることが知られている。農耕に欠かせない南部駒を産出した当地方としては、人馬の安全や農作物への野獣の防禦を御眷族の狼の力に期待し願ったのだろう。

写真７．青麻神社が発行する三峯神社の護符。青麻神社拝殿には、三峯神社の掛軸も掛けられている。

夜道を山歩きする人々は、オガラ（麻の茎）を束ねて作った松明を下向きに振りながら歩いたという。その際、常に護身用のセガマ（才鎌）を身に付けていたのは、狼の来襲を恐れてのことだった。また、狼等の獣から身を守るための槍も確認している（写真８）。

これらの槍は、紫波町赤沢の中でも最も山奥に位置する船久保集落の古い農家に残されていたものである。赤沢では、槍は常居（居間）の鴨居に掛けられ、遠野市に隣接する大槌町でも、常時座敷の壁に槍が掛けられていたと聞いている。また、狼や熊を倒す名人として知られた大槌の「オイノ突きの人」[17]の槍も、おそらくこれと同様のものと考えられる。

曹洞宗の養竜山高金寺は、永正二年（一五〇五）に創建されたと伝わる、紫波町の大巻に鎮座する寺院だが、この付近も狼の行動域だったと考えられる痕跡がある。新墓に手向けられる狼除けの鎌である（写真９）。これは、狼が死者の屍を荒らさないようにするための一種の

りは特別な時にのみ吹くことが許されていたものだったといえる。ホラノゲエの合図で人々は何かの異変を察知したようであり、酒に酔った人が吹いた時には、大勢の人が集まって困ったとも聞いている。

このホラノゲエはまた、空気が澄んでいる早朝に吹くと音がよく響いたそうである。小正月には、北上川を挟んで町内の大巻と赤石集落の子どもたちが、ホラノゲエを競うように吹き合ったという逸話もある。行事の終わった後に許されたひとときであり、子ども達にはホラノゲエを吹く練習の場でもあったのだろう。

（八）

紫波町から南西の方角に位置する和賀郡の沢内村（現西和賀町）にも、同様の伝承がある。小正月の旧一月一五日に行われていた「オイヌ追い」は、周辺地域の中でも古くまで行事が残っていた若畑地区に伝わっていた。風の神祭と一緒に行われたオイヌ追いは、簡単なお膳に料理を用意し、「オイヌ様、山に静かに暮らしてください。自分達が山に入っても、里に暮らす者に害をしないで下さい」と願い、ホラノボーを山に向かってホーホーと吹き鳴らすものだった。[13]

沢内村には、江戸時代に狼狩りを行ったという二つの記録もあり、[14]

写真４．江岸寺の坂。現在も薄暗い道である。

写真５．ホラノゲエ（赤沢）長さ約40cm。直径６cm ～ 10cm。

写真６．ホラノゲエを吹く様子。写真は田村由郎氏。

やっぱりオイヌの眼が遠くさ遠まきに、眼がテンガテンガと光ったと。オイヌの眼というものは、光るんだと。あっちさもテンガテンガ、こっちさもテンガテンガと、光って唸って。あっやっぱり来たと思って火焚いていたと。そうしたところが、まだ夜は明けねえのに集めた木がなくなってしまったったって。で、こりゃあもう焚く火ももう、襲われて死ぬしかねと思ったんだと。そうしたところが、だんだんにだんだんにオオイヌがこう近づいて来たと。そして人は、おれはもう食れんだなとその時思ったんだと。そうしているうちに、唸って唸って近づいて来た。

どうしようもねえから、煙草の火を付けたんだと。そして煙草を一服して食れんだなと思って一服してから、鼻っぱしさ近づいてきたけ、はい、お前もあがれって狼の鼻っぱしさその煙草を突き出したんだと。そうしたところが、ビョーンと跳ねて後ろさ行ったったと。で、それっきり遠くからウーン、ウーンと唸っても襲って来ねかったんだと。オオイヌというものは、ほんだらば煙草を嫌がるもんだんだっけが、オイヌも煙草嫌んだんなて。その人さ里へ来てから喋ったと。その煙草の火に助けられたんだと。

（話者六九歳女性　筆者聞書き）[8]

オオイヌはオイヌであり、狼である。狼の呼称は地域によって若干異なっているが、岩手では多くの場合はオイヌと呼ばれ、他に「オオカベ」や「オオガミ」等の名もみられる。[9]

峠越えが予定よりも遅くなってしまった男が、馬を狼から守るために野宿することにし、狼除けの火を焚く薪を集める。そして予想した通り、火を焚き出した頃に、遠くから少しずつ狼の眼が光りながら近寄ってくる。ところが、肝心の薪が夜が明ける前になくなってしまい、男は狼に喰われると観念する。せめて最後の一服をと思い、煙草に火をつける。そして近づいて来た狼の鼻先にその煙草を突き出したところ、狼は火に驚いて後ろに跳ねのき、それ以後は近寄って来なかった、という内容である。煙草の火に救われた男の話である。

擬態語を豊富に使った巧みな語りには、多少の脚色があると思われるが、狼が人馬に近付く方法や火を嫌う点は、実態に近い伝承と考えられる。火で狼を遠ざける対策は、各地の伝承にも認められるからだ。[10]

遠野に隣接する大槌町にも、煙草の火で狼を遠ざけたという話が伝わっている。ちょうど遠野を越えた新山近くに来ると、夜に狼の眼が光っていることがあったそうである。そのため新山を通る人は、煙管に煙草を詰めて「だんなさん火っこきいてきたんせ」と言って通ったものだという。[11] 煙草を持っていれば狼は咬まないと考えられていたようであり、狼の光る眼を煙草の火に間違えたという話を思い起こさせる言葉掛けである。また、狼に限ったことではないが、沢に入る際には入口でまず煙草の煙をくゆらせ、山に煙を漂わせることで獣を遠ざけたという伝承もある。[12] 獣たちとの無益な接触を避けようとした古人の知恵である。

煙草の火の他にも、狼を遠ざけるために用いられていたものがある。ホラノゲエである。紫波町赤沢の民俗資料館にある三本のホラノゲエは、長年の煤によっていずれも黒光りしている（写真5・6）。桐の木の内部を炭で焼いて穴を作ったといわれ、このようにすると一定の音が出しやすくなるという。桐が用いられているのは、軽くて扱いやすいためもあるだろう。

大巻の長澤家に伝わるホラノゲエは、桐製のものに加えて、一升瓶の底を切ったものもある。一升瓶の方は、大正から昭和の頃に製作されたものであり、音が出やすい。木製のアレンジ版ともいえる。

ホラノゲエは、各家に一つあるものだったが、火事や百姓一揆の時、また小正月の一月一六日以外は吹いてはいけないとされていた。つま

（七）

うに馬に柿を積んで盛岡へ向かっていたところ、長岡地区の村境にある江岸寺の坂でオイヌに遭う。そして馬の上にいる祖父に飛び掛かってきたという。驚いた馬の尻を叩いて走り抜け、何とか助かったが、柿を積んだ分高くなっていたので助かったと語っていたそうだ。そして帰って来た時には狼はすでに倒され、騒然としていたと語られている。明治三〇年頃のことのようである。

（二）、人馬に近づく狼

釜石街道の途中に当たる遠野市南部の仙人峠にも、狼にまつわる話が伝えられている。釜石街道は、盛岡や花巻から遠野を経て、沿岸の釜石まで続く太平洋へ抜ける道であり、山海の物資を運ぶ多くの人々が行き交っていた。遠野は城下町であると同時に宿場町でもあり、往来の人々で大いに賑わう町だった。

積み荷は馬の背を借り、人一人に対して二頭から四頭の馬を繋いで組み合わせるのが一般的であった。そのような人馬に狼が接近するのが次の話である。

事例五、オイヌの話（遠野市松崎町）

仙人峠にいたんだと。ある時ある人が、駄賃付けというのがあって、こっちからは里のものを付けた馬で行って、帰りには魚を付けてっていう風に駄賃付けをしたもんだ。そうするとオイヌが襲って来るっていうことで、朝は早く出はって行って、暗くならないうちに峠を越すように商っていたったんだと。

そうしたきゃ、ある時ある人が行ったら、戻りが遅くなったんだと、浜からこっちさ来るのがな。そうしたら、大変（てえへん）だな、オオイヌが出る話は聞いていたったが、大変だと思って一生懸命急がせたんだと。せたどもなかなか急がせねえ。そうしてるうちに、あんまり暗くなって

しまったから、これでは大変だ、必ずオオイヌにこれは襲われるからと思って。火を焚けばオオイヌちゅうものはおっかながって来ねえかなと思って、木を沢山集めたんだと。

そうしていたところが、駄賃付けは一匹も二匹も三匹も繋いで一人で引張ってくるわじぇだから。オオイヌというものは、馬を襲う時は一番先におしりの馬から先立ちの馬さ、びょーんと越えながらおしっこすんだと。小便ひっかけんだ。そうすっと、眼さ入っから、もう馬は歩けなくなるんだと。そうやってから馬を襲うもんなんだと。そういう風にされたらもうだめだから、ということを聞いていたったから、それでこれはなんぼせえたって、里までは行けない。夜中にまたなってしまうがら、それよりはここで火を焚いて夜を明かしてそれから落ちて行くべと思って、火を焚く薪を集めたんだと。そしてば、まずこのくらい燃えたらよかんべと思って、木集めて火を焚き出したところ、

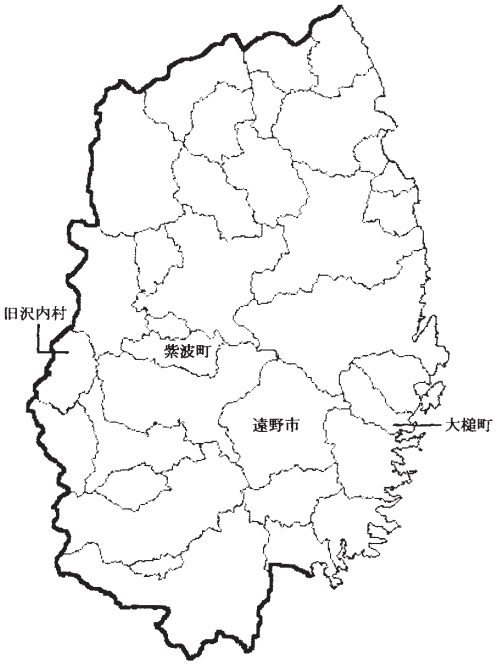

図２．岩手県関連市町村位置関係
（本図は帝国書院のデータを元に作成したものである。）

事例三、湯殿に来るオイヌ（紫波町大巻）

夜、離れにあった屋外の湯殿に入っていると、狼が壁を叩いて襲われそうになった。

湯に入っている人が恐れをなして、家に向かって「助けてけろ」と叫んだ。大きな湯釜を出して叩いて金属音を出したところ、オイヌがいなくなったのでそのすきに湯殿から家へ逃げた。

（話者六二歳男性　筆者聞書き）[6]

この出来事は、遠山であったこととして伝わっている。薪を焚いて入る風呂は、母屋から離れていたため孤立しがちだった。野生動物の嫌う大きな金属音を出して助かったのがわかるが、狼が湯殿のすぐ外側で壁を叩いている時の心持ちはいかばかりだろうか。他にも、町内には狼が尾につけた水を土壁にかけて溶かした話や、床の下をムリムリと背をこすりながら歩いたという話が伝わっている。尾を水で濡らす点は、前述の伝承にも関連するだろう。また、かのこ建てと呼ばれる当地の古い家屋は、土台石の上に直接柱を載せる方法で建てられている。床下に空間があったため、動物の侵入が容易だったようだ。

これらの伝承からは、狼が人間の生活圏に行動領域を持っていたこと、また人々も狼を身近に感じながら、その行動を観察していた様子がわかる。北田の星川にはまた、馬上の人に襲いかかる狼の話があった。

事例四、馬を越えるオイヌ（紫波町北田）

松田柿って、この辺の松田柿は美味しいってね、売れたんだもんね。尻のほすっと下がってね。家には柿の木がいっぱいあってね。

一本梯子で木に登って、収穫終われば少し休んで。みんなで選別して。その日のうちに運べばいいってね。俵に入れて、夜中に出て、朝帰って来たって。行く時は太陽がないけど、帰りは太陽があるって。準備ができればすぐ出たってね。盛岡まで持って行って、明日何時頃来るって言って、また次の日積めて運んで。

馬に荷鞍をつけて、柿を積んで。おじいさんはその上に乗っかって。江岸寺の坂のところでオイヌが出てきた。あんまり気持ちの良くない道だってね。

馬の上にいるおじいさんに飛び掛かってきたって。馬もあわてて。馬の尻に狼の爪痕があったったってね。馬をはたきはたき逃げたってね。そこを過ぎればちょっとした町があるから助かるんじゃないかって。走ったら、オイヌは追って来なかったって。

明け方に盛岡から帰ってきたら、オイヌが獲られてわいわいと騒いでたらしい。鉄砲打ちに撃たれたか何かな。

柿のおかげで命あるって、一度言ったったってね。

（話者七一歳女性　筆者聞書き）[7]

毎年収穫期になると一家の主が市田柿を収穫し、子どもから大人まで、家族総出で選別して俵に詰めたという。馬に荷鞍を付けて柿を積み、主は夜中のうちに盛岡へ向かった。いわゆる駄んコ付けである。柿は盛岡の鉈屋町にある雑貨屋まで運んだようであり、店では到着するとすぐに焼酎をかけて保管し、渋柿を甘柿にした。柿の収穫期には昼夜を問わず受け付けていたようである。

北田の星川から盛岡までの道程は、馬の足で約四時間かかった。とはいえ紫波から夜通し歩いても、帰りは朝方になった。馬は幾度も往来したこの道を熟知していたので、帰路は馬に任せて、祖父はその背で揺られながらうたた寝をするのが常だったそうである。星川から盛岡までの道は、かつての釜石街道に当たると考えられる（写真4）。

そのように毎年柿を運んでいた祖父だったが、ある時、いつものよ

（五）

図１．紫波町関連箇所周辺図

（この地図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図「紫波」「日詰」を使用したものである。）

事例二、尾を濡らすオイヌ（紫波町遠山）

明治二二、三年頃、小高い山麓の木の根元に泉が湧き出ているところがあり、その附近でオイヌが尾を濡らしていた。母親が赤ちゃんをおぶって、山を越えて親戚の家へ行った帰り、夕方オッタ澤の方の田んぼ道の堰で、オイヌが尾っぽに水をつけていた。闘争心を持っていたので、恐ろしいのでその横を通る近道を避けて、遠回りをして帰ったという。

（話者六二歳男性　筆者聞書き）[5]

泉の湧く場所は、写真3のように山とはいえ低いものであり、周囲には高い山もない。昔は堰も今程深くはなかったようだ。沼田林や門田山と同様に、里山といえるような土地に狼が生息していたのがわかる。

また、入浴中に狼がやってきた話もある。

写真１．北上川への往来に狼が通っていたと伝わる道。

写真２．狼が魚を獲っていたという箇所（現在の様子）。

写真３．写真中央の樹のあたりに泉がある。

はおそらく改善していくことが予想される。狼が増えれば鹿や猪の増加に歯止めがかかり、農産林の被害も減少していくだろう。しかし、放たれた狼は本当に人間のコントロール下におくことができるのだろうか。

狼の民俗を調べていく過程で、筆者は人々の側にいた狼の在り様の一端を知ることができた。それは同時に、野生動物である狼への恐れというものも少なからず感じることになった。今の私たちは、野生の狼について、いったいどのぐらい知っているといえるのだろうか。狼の近くで暮らして来た人々の伝承に学ぶことはないのだろうか。

本稿では、かつて狼が生息していた岩手県紫波郡紫波町および遠野市の調査で得られた新資料を中心に、人と狼との関わりの歴史をみていくことにする。

二、身近に生きる狼たち

（一）魚を獲る狼

紫波郡紫波町は、北上盆地の北部に位置し、中央を北上川が南流する町である。盛岡市と花巻市の中間地点に当たるため、近世期には奥州街道の宿駅として、また北上川舟運の河岸としても栄えていた。この紫波町に、狼が魚を求めて北上川へ通っていたという話が伝わっている。

事例一、沼田林のオイヌ（紫波町星山）

星山地区の「舘神さん」（舘林神社）の東側に「沼田林」という林がある。

ここの林には昔オイヌ（オオカミ）が住んでいたそうだ。頭数は数頭であったらしい。

このオイヌは、夕方暗くなると山から下りて来て、柳田（屋号）の前を通り、北上川へ出て、ざっこ（魚）を取って食っていたそうだ。

そして、朝方には山へ帰ったそうだ。

暗くなるまで外で働いていると、山から下ってくるオイヌが見えたそうだ。

（長澤聖浩『百歳。作山リエさん聞書き集』[2]）

（二）

沼田林に生息した数頭の狼が、夕方暗くなると山から下りて来て北上川へ行き、朝方にはまた山へ帰っていく姿が地元の人々に目撃されていた。暗くなるまで働いていると、山から下ってくる狼が見えたというのである。またこれに近い大巻の門田山にいた狼も、毎日夕方になると山から下りて、いつも同じ道を通って北上川へ向かっていたと伝えられている。この狼の通る道を「オイヌ道」と呼び、田畑で働く人々は、一定の時刻に通る狼たちを時計代わりにしていたといわれている（写真1）。明治一〇年代から二〇年代頃の話である[3]。のどかな光景のように感じられるが、狼は不断は大人しものの、時に強暴になることがあったとも伝わっている。気の於けない動物として、常に人々の注目を集めていたのだろう。

紫波町を流れる北上川は、川幅が広く流れも速い（写真2）。狼が魚を獲るには適していない印象を受けるが、狼が生息していた頃の川の形状は、現在のそれとは少し異なっていた。町内に伝わる文久三年（一八六三）の地図（個人蔵）によれば、紫波町近辺を流れる北上川には、本流から部分的に分かれたよどみのような箇所のあることが確認される[4]。当時は狼にとって今よりも比較的魚を捕獲しやすい環境にあったと考えられる。

また同町の北田近辺にも、水に関わる狼の話が次のように伝わっている。

岩手の狼伝承考

―紫波町と遠野市を中心に―

菱川晶子

野生動物の増加による農産林被害の深刻化に対して、絶滅したニホンオオカミに近い種の狼を再導入しようという案が出されている。本稿は、狼の民俗や人との関わりの歴史について探るものだが、身近に狼が生息していた時代に、人々は何を見てどのように行動してきたのか、また何を語り伝えようとしてきたのかをも示すものである。

今回は、岩手県紫波郡紫波町、および遠野市の調査で得られた伝承の一部について考察を加える。

キーワード　狼　伝承　水　狂犬病　来襲

一、はじめに

近年、狼に関わる書籍が続けて刊行されている。翻訳本が多いが、それだけ狼に関心が持たれているということなのだろう。

理由の一つに考えられるのが、野生動物の増加に伴う様々な被害が深刻化してきていることである。確かに、調査先で獣による畑作物の被害について耳にする機会は多くなってきている。また、今までなかったような土地への猿や猪の出没についても話題になることがある。さらに、鹿等による国立公園の自然破壊が広範囲に広がりつつあるというこの状況は、私たちに、これまでにない危機感を抱かせるものになっている。

このような状況を生み出した要因の一つに挙げられるのが、狼の不在である。鹿や猪等を捕食する狼を再導入すれば、諸問題の解決に繋がるとして活動するグループもある。最近では、人口減少によってこれから増えていくわが国の「無人地帯」をどのような場にしていくのか、生態系の修復なしに自然を健全に保つことが可能なのか等について、検討する時期にきているとの指摘もある[1]。

野生動物の増加には、野獣駆除に当たる狩猟者の減少や高齢化も関わっているとみられる。これを是正し、狼を今の山林に戻せば、状況